

第一章 戒祈屋リリエール^{かいきや}

空から雨粒が降り注いでいた。

とうの昔に水を吸いつくした服は、レンガ造りの地面にへばりついて離れない。

わずかに動かすことのできる指先は、微^{かす}かに震えながら紙切れを握っていた。もうすっかり濡れそぼってしまっついて、そこに記されている文字を読むことすらできない。

慎^{つら}ましやかな家屋が並ぶ路地には、人ひとりの姿すら見えず、閑散^{かんさん}としていて、まるで世界から目を背けられてい

るような疎外感を感じた。

僕は道の上、独りぼっちで、死に瀕ひんしていた。

——いったいどこで道を踏み外したのか。

「……………」

とかこんなシリアスっぽい雰ふん囲い気きを微妙に出してるけど
実際お腹減なかつてて身動き取れないだけだからねマジで。あ
と雨降つてるとか言っただじやん？ これも違うから。実際
には近所に住んでる飛竜ひりゅうが水浴びしてるせいで飛沫しぶきが撒まき
散らされてるだけだからマジで。

あと腹減った。

このままだと僕死んじゃう。

……とまあ。

そんな風に瀕死のくせにわりと元気な思考回路を回しているときのことだった。

「——あらっ？」

「ごしゃっ。」

鈍い音が激痛と共に流れたのと同時に、女の声が出た。僕の後頭部にあたる部分がどうやら足蹴あしげにされたらしいと理解できたのは、「あ、ごめんなさい蹴っちゃったわ。大丈夫？」と同じく女の声が上がって投げ下ろされてからだった。

おいおいおい瀕死の子をいたぶ蹴るとかもう万死ばんしに値するよ！

お相手に対するささやかな殺意と、ついでに誠意の籠つ

た謝罪と賠償への期待を込めて見上げると、やや驚いている女性の顔があった。「あ、こいつ生きてたんだ」とか思っ
 ってそんな感じにまみれた表情ですらある。なんつー顔してんの蹴っ
 ておいて。

僕としばし目を合わせた彼女は、小首をこくりと傾げ、
 「……何か言っただらどうなの？」と表情を一切変えず宣っ
 た。もしかして僕が道に倒れてるのが悪いとか思っ
 ておられるのかな？

しかし。

見れば見るほど不可思議な女性で、ざらりと伸びた髪は
 艶やかな紅葉のようで、僕を見下ろす瞳は、吸い込まれ
 そうなほどに深く深く蒼い。頭にちよこんと載せられた小

さなシルクハットの上から覆おおいかぶさるように日傘が差さ
れていて、僕はこのとき、頭上にかかる飛沫しぶとぎが遮おられて
いたことに気づいた。

着ている服は喪服もふくに見えた。ドレスのように優雅な黒の
ロングスカートに、黒いジャケット。袖そで口からは灰色のフ
リルの袖が覗いていて、見れば日傘を握る手袋すら真っ黒
だった。

すべて黒で覆いつくされているにも拘かかわらず彼女の顔は
とてもとても白くて、綺麗きれいだった。

「こんな道端みちばたで倒れていたら通行人の迷惑になるわよ。そ
して現に迷惑してるわ」

僕が口を一切開くことがなかったのは、もしかしたら彼

女に少しだけ見惚みとれていたからなのかもしれない。

「……あ、う……」

うんうん。

じゃなかった。

普通に声を絞ることが出来なくなっていた。

さつきまで口に放り込まれてきていた水滴のおかげで喉は潤うるおっているはずなのに、声はすっかり枯れていた。

僕は僕が思っている以上に、僕としての限界に近づいていたようだった。

景色は秒ごとに段々とぼやけていって、目の前にあるはずの女性の姿が、窓の向こうのように遠く、隔へだたりがあるようにも見えた。